

論文の内容の要旨

「生きている」音楽 —ハバナにおける「キューバ芸術音楽」の日常経験—

田中 理恵子

カリブ海の大アンティル諸島に位置するキューバ共和国の首都ハバナには、全人口の約2割に相当する約200万の人々が暮らしている。強い日差しが照りつけ、キューバ・スペイン語が行き交うなか、社会変容期にあるハバナにおいて、人々は音楽という一つの音の流れをかたちづくる。この論文は、彼らが営んできた「キューバ芸術音楽」を中心として、現地語では「生きている（ビーボ）」と表現される、彼らの今日的な生と音楽の動態を、民族誌的に明らかにしようとするものである。

本論の主な調査地は、ハバナの旧市街地、新市街地、プラーヤ地区の3地域である。3つの地域は、北にメキシコ湾及びフロリダ海峡を望む、いずれもハバナ海岸部の中心的な街であり、その空間には多くの音楽関連施設が点在している。また地域史の観点からすれば、旧市街地は、主に17世紀に建てられた建物群が並んでいるのに対して、新市街地は、第一次世界大戦後の資本家やバティスタ政権要員の高級住宅地として開発された地域であり、プラーヤ地区は、革命後に国立高等芸術院が配置されているというそれぞれの特徴を持つ。

上記の地域で音楽を実践する人々は、「キューバ芸術音楽」をめぐる今日の状況において、不在、点在、統合、分裂といった局面を経験している。すなわち、ひとつの局面では、音楽学習の場面に顕著なように、環境の不備や人材の不足といった様々なものがない（不在）という、否定形で言いあらわされる状況が続いている。他の局面では、劇場や音楽院などの音楽施設が、たとえハバナの住人があまり訪れないとしても、各地に置かれたまま（点在）となっている。さらに音楽家たちは、どのような災難に遭遇しようとも、情熱をもって「キュー

一バ音楽」をまとめ上げている（統合）。また別の側面では、国家イデオロギーとの結びつきからは離れつつある（分裂）といった局面に遭遇している。

そのような経験において生じる情熱や感動を、ハバナの人々は「生きている（ビーボ）」という言葉で表現する。本論文ではそのような、ハバナに暮らす営みのもとで音楽をかたちづくる、生と音楽の「生きている」状況に注目する。さらにその営みが、一方で異質なものを結びつけ、他方で変化をもたらす生の循環を、本論文では「変換」と「永続」の概念によって言い表す。このようなアプローチは、理論的には、民族＝文化を固定的な同一性の枠組みに閉じ込めることなく、混在的で流動的な同一性のようなものの創造を捉えようとする、近年の民族誌的な探求と同様の問題を提起するものである。

序と第1章において、ハバナの音楽実践の特徴とその理論的な上記の課題について整理した後、第2章では3つの調査地について、人々がその地域の空間と時間を共有することの特徴を検討する。人々が継続してきた音楽実践をめぐって、キューバ植民地史の概説も含めて見てみると、これらの地域には実際に、日常生活の空間、伝統的な音楽実践、人間集団の社会的構成、政治的空間、といったそれぞれの局面が、本来的に混在した状態にあることが分かる。他方で、それと並行して人々が認識してきた、キューバの内／外といった区別は、近年の政策転換によって、外国（人）／キューバ（人）という対立項と強く結びつけられている。そのような重層的な現状は、近年の社会変化を人々に強く意識させるものとなっているのに対し、音楽の実践は、音楽教育や音楽一家による継承という枠組みによって、ハバナの音楽空間を保持するものとなっている。このような揺れ動きのなかで、ハバナの人々は、ここに在り続けるという心性や情熱を持っていることが見てとれる。

前章までに見たハバナの芸術音楽をめぐる社会的・政治的な諸相の一方で、音楽実践の場面でしばしば遭遇するのは、壊れかけの電子ピアノ、音を出さない指揮者、隣の教室から響く打楽器といった不十分な環境の中でも、ショスタコービチの交響曲の練習に顔を上気させるような、音楽に心を動かされる人々の姿である。このような場面においては、先に述べたような、外面的な条件はむしろ後景化し、人々が音楽に満たされる、あるいは興奮するといった、より内面的な状況がきわめて強く表出する。

これを受けて、第4章では、音楽の興奮や感動をもたらすひとつの機序として、音楽家（人）と楽器（物）との関係について考察する。音楽を奏でるのに不可欠な、楽器の演奏技術を習得する学習プロセスは、音楽家が楽器を身体化する、あるいは楽器と音楽家が一体化することを理想とするものとして捉えられてきた。しかしキューバ芸術音楽の学習プロセスにおいて、大きな部分を占めているのは、いわば共同的な関係を前提とした楽器と音楽家の統合に向かうものだけではない。そこには、個別の楽器－音楽家の接触、一体化、同化や否定、といったさまざまな関係性の推移が見てとれる。なかでも、楽器と音楽家の関係が同化する、あるいは否定する、といった局面は、一方で、制度的な音楽学習においては排除される傾向にあるものの、他方では、コンサート演奏などの一回性の場面において、一転して力強く表出することになる。そのような楽器－音楽家の不均衡な関係こそが、楽器－音楽

家の力関係を調整するための共同的な関係を求める学習プロセスを生み出していることが見てとれる。さらには、楽器に憑かれるといった、音楽家たちに共通して見られる感覚は、楽器—音楽家の関係がつながり続けるという、いわば複合的な主体のありようを示しているといえる。

第5章では、先の学習プロセスに見られた主体の揺れ動きとも不可分にある、トランス・ジャンルな実践について考察する。ハバナの音楽実践に特徴的なトランス・ジャンルな実践は、複数のジャンルにわたってさまざまな実践を行うことであり、もともと多様な音楽的要素から成る「キューバ音楽」は、「メスクラ（混成）」という言葉で表現されるように、複数のジャンルや実践を織り交ぜることをしばしば行っている。しかしこのような音楽実践は、複数の音楽を身につけているといった表象的なものではなく、音楽家たちがひとつの音楽としてまとめ上げるような基準を持ち、トランス・ジャンルの深層にある同一性のようなものを示している。ハバナの音楽家にみられるこの実践は、音楽家自身がそれらの多彩な音楽を、本来的に多重な成り立ちとしてある「キューバ音楽」へと、いわば自身を明け渡しながら音楽を再構成するという、身体的な両義性を見ることができる。

第6章では、前章までのプロセスが、より複雑な集合体として実践される、オーケストラ活動について考察する。実際の演奏でのやりとりを分析する作業では、オーケストラにおいて生じる出来事が、一方で個別の音楽家の表現を否定しながらも、他方では人々とさまざまな事物とをむすびつけ、人々に刺激を与えてまとめ上げる様相として浮き彫りとなる。そのようなオーケストラ演奏において、個々人の演奏や活動は、オーケストラという集合体に導かれるかたちで行われ、そして人々の「感動」などにむすびつく働きを見せている。このことを踏まえると、オーケストラの特徴は、個人の音楽家によって成り立つことはない上、人々が決して統御することのできない次元を内包していることにあると考えられる。すなわち、オーケストラでしか行うことのできない音楽や演奏が、その内部に「生きている」状況を不断にもたらしているといえる。

第7章では、そのような変換と永続の流動性が、今日のハバナにおける社会変化の一面に、きわめて具体的に入り混んでいる現状について検討する。芸術音楽家の社会的優位性は、ある程度の再生産を見せるものの、その体制が有機的につながっていない今日では、音楽家たちに大きな戸惑いが生じている。他方で、近年増加する傾向にある国際音楽祭の開催は、ハバナの住人に音楽を浴びているといった感覚をもたらしている。このような変化のなかで、人々はさまざまな変換の場面として、居住空間でのカフェの建設、水道や道路といったインフラとの関わりが見られ、人々は「パサール・ビエン」（良い暮らし）に向けて、「生きている」現状を絶えず更新しようとする。換言すれば、現在のハバナにおいて音楽が流れていること、人々が暮らしていること、これらの2つの局面に共通することは、ばらばらのものや統合性を失いつつあるものが、相互に結びつきを持つなかで立ち上がる、時間的・空間的な運動、その継続によって生じる流れと反復性にあると考えられる。

本論の考察は、一貫して、「情熱」や「感動」といった動きが、ハバナにおける生と音楽

の「生きている」状況と深く関わることを記述している。そこで描く運動性は、「いま・ここ」を省察することをうながす人間関係や物質の不在や、もともと混淆的で流動的なわれわれの非同一性を具現化する「キューバ音楽」、そして、その実践に向けて音楽家に主体の放棄をうながす楽器、同じく個々人ではコントロールの効かない次元に導かれるオーケストラでの体験として示される。さらに、そのようなハバナにおいて音楽が聴こえるといった感動は、単なる聴覚や空気の振動を捉えた経験ではなく、音楽をめぐって相互に触発しあう人間と事物との連鎖的な関係を、いわば身体に直接に響く次元から捉えている＝音楽の感動と直結するものとして表わされている。このように、音楽や生をめぐる直接的で生き生きとした関係に注目した本論のアプローチは、人間存在の根源的な運動性を描き出すものでもある。